

串田孫一氏に見る文章作法

藤谷博亮

ついでこの間のことであるが串田孫一氏の文章を読んでいて次のような箇所が目が止った。その文章は「表現の悦び」という題の一口に言えば文章作法について書かれたものである。その終りの方に人が自分の作品を他人に見せる時にはそれを作った人は「へり下る傾向にある」とあった。へり下る傾向にあるという言い方は他にあまり見ない表現のようでもあり興味深く思われた。そこで串田氏が文章表現について書かれたものをある程度まとめて読んでみようと思ひ立ったのである。

氏には「文章による表現」と題して十九篇の文章をまとめたものがある。「自然と美と心——人と思想——」Ⅲ文章による表現、文芸春秋社）それらは「表現の悦び、手紙について、古い手紙、愛情の衣裳について、哀歌、心づかい、リズム、アクセント、日記について、白い頁の魅力、深刻を悦ぶ心、幸福の影、素顔、息づかいについて、手垢のついた言葉、文学のことで、独白と対話、詩について、思想の表現」である。これらのうち「表現の悦び、手垢のついた言葉、文学のことで」の三篇は「表現の悦び」に掲載されたもの、「手紙について」以下「素顔」までの十二篇は一九五五年の半

ばから一九五六年にかけての一年間、創刊間もない雑誌「若い女性」に連載されたもの、「独白と対話」は筑摩「文学講座」に掲載されたもの、「詩について、思想の表現」は講演草稿である。書かれたのは巻末の「初稿発表覚え」によれば一九五一年四月から一九五六年七月である。これらの中から「古い手紙、愛情の衣裳について、哀歌、文学のことで、独白と対話、詩について」を除いた十三篇を取り出してそれらに見られる氏の文章表現に関する主張をまとめてみたいと思う。

二

「表現の悦び」（一九五六年七月。巻末の脱稿年月一覽による。以下同じ）は十九篇の文章の中で一番新しく書かれたものである。氏の文章表現に関する考えが総括されてある程度まとまった形で書かれている。ある程度まとまった形というのは形式的、にまとまっているという意味である。ここに見られる氏の文章の特色は全体として、一つのまとまった形をとりながら、叙述の方法がおおむね随想的連想的であり第〇章第△節という形式を必ずしもとっていないことである。その中でこの文章は比較的まとまった形式をとっているのである。このことについては後にもう一度触れることにする。

この文章は四章から成っている。I章には文章表現をしようとする時にいつも問題になる何を書くかということが述べられている。「私は書く前に何を書くかということを自分で納得することが恐ろしい。よく分ってしまえばそれは書くに値しないのかも知れないという不安である」と言い、本来ならば誰もが言っていないことだけが表現に値するのかもしれないが我々はそういうことにはおかまひなく色々表現しようとする。しかもそこには一つの悦びや多少の自惚れがあることもある。それを「表現の悦び」と言っているのである。これは「忍苦の創造」に対して言われていて文章表現がすべて苦しみに充ちたものではなく必ず悦びが出てくるとも言っている。このようにして書かれた文章にはそれを書いた人の気持が当然表わされているが必ずしも書いた人の思惑通りに相手に通じるとは限らない。受けとる方は書いた人が気がつかない箇所からその人の気持を感じ取ってしまうこともある。自分を隠すために文章を綴ることも出来るし「それをもいやがる人は文章を書かずにいるより仕方がない」と述べている。教師というのは立場上文章を書くことを強制することが多いのだが、書かされる側の気持を代弁するものと受け取ることもできる。統いて紋切型の表現に言及している。既成の言葉であるから表現に個性がなくなる、型にはまった言い方は逆に思考の型さえも作ってしまう、文章の本当の力は鋭利な刃物のようなもので文章は対象を鋭く切らなければならない、その切られた断面を見て読者は驚くのだとしている。文章のあるべき姿を適確な比喻によってうまく言い当てている。紋切型の表現は好ましくないと見做されているにもかかわらずわが国の国語教育は「習うより慣れろ」

で標準的な表現に習熟することを大きな目標としている、と成瀬武史氏はその著「ことばの磁界」(文化評論出版)の中で指摘している。欧米ではそれをもう一步進めて「慣れたら変えよ」自らの文体を培い平易で生き生きとした表現を旨ざしている。わが国の国語教育に見られる受動性を排除せよと言っていることには串田氏に相通じるものがある。

「表現の悦び」のII章には文章を綴ることの効用が述べられている。自分のほんやり考えていたことがはつきりとし確かにそうだと思いついたことが辻褄が合わなくなったりして自分の内部で「きちんとすること、きちっとすること」が行われるがそれは快いことだとしている。自分の書いた文章の中にその人の姿があり知識をふやし訓練すればそれをいくらでも立派なものにしていける、そこにも「表現の悦び」があると述べている。

III章は朗読について述べてある。ここでいう朗読は「自分のために、自分の書いた文章を、声を出して読んでみる」の意である。この朗読を是非することをすすめているがこのことは「呼吸」との関連において強調されているのである。この「呼吸」は文字通り生きている人間の呼吸を指している。自分の文章を声を出して読んでみて読みづらいのは呼吸が合っていないからでその人らしく綴られていないことがわかる。不自然な技巧を使っているからであるといる。

IV章は文章の批評について書かれている。「一つの文章なり他の作品を人に見せる時に私たちはそれが自分の生み出したものならば責任を持たねばならないことは勿論だが、何としてもそれを作った

人はへり下る傾向にある」のが批評を求める人の心理である。批評する人の方に「暖かい懐しみとあまり大袈裟にならないような遠慮」があれば一つの確実な倫理的な雰囲気を伴った確実な効力がある、それを批評するものの親切さ、批評の技巧とも言っているのである。文章の批評に伴う心理的側面に触れたものをあまり見たことがないので、はじめにも述べたようにこの箇所を興味深く読んだのである。この文章に述べられている紋切型の表現の問題はこれより前に書かれた「手垢のついた言葉」ですでに論じられている。呼吸に関することもやはり以前に書かれた「思つかい」の中に述べられている。これら二つの文章の延長線上にあるので溯ってこの二つの文章に目を通すことにする。

三

「手垢のついた言葉」（一九五四年六月）では、それをを用いることによって文章は生命を失い「文章が腐る」。子供は独創的虚想的な作文を作ることもあるがそれは子供がまだ大人の一番多く使う言葉をはつきり知らず自分の言語の限界の中で正直に表現しようとするからで、国語教育によって言葉を豊富にすることが大切だとしている。言葉の制限は驕傲りの文章を作ることにもなりかねないし手垢のついた言葉を使うことにもなる、そのことが精神のうち自己欺瞞や妥協という悪徳を育てることにもなりかねないとしている。精神面での弊害を述べることから思考の型・対象の切り方の問題へと発展しているのを見ることが出来る。

「思つかいについて」（一九五四年二月）は自分の呼吸や鼓動が

文章の中にどう移されるかということを書いている。それらを完全に文章に移すことができるならば自分の表現したいと思ったことは最もよく損わずに向うへ移ってくれる伝達の場が出来る筈だと思つた、自分の生命を存続させている思つかいが文章にどんな風に移されたかは書いた文章を読み直し声を出して読んでみる時に吟味することができるとし、数年前から自分の書いた文章を声を出して読む習慣がついたと書いている。文章による表現は単なる技巧ではなく生そのものの緊張によるものそこに自分の生を一つの律動として表わすことができればそれに接した人は自分の生が自身の力によって到底望むことができないほどにおのき始めるのを感じるだろうとしている。伝達の場という考え方は後には見られず、むしろ自身の問題として不自然な技巧を避けるためのものとして呼吸や朗読を論じているのである。

四

「手紙について」（一九五五年七月）は「若い女性」の連載一回目の文章である。詩を書いているというお嬢さんが訪ねて来てどんな風に詩の勉強をして行つたらいいんでしょうかと尋ねられて「自分の日記や手紙をていねいに緊張して書くようにしたらどうでしょう」と答えたが、日記や手紙をていねいに力を入れて書くということとは詩に限らず文章を真剣に書きたいと思つている人にすすめたいと述べている。氏自身そのことを常に心がけているのだと「あとがき」にもある。

この文章に続いて連載（十二回）の前半は主として手紙について

後半は主として日記について書かれている。

「心づかい」（一九五五年十一月）では手紙は誤魔化しがきかないということを書べている。服装や髪型口のきき方ものの考え方には一般的には男女はこうあるはずというものがある。しかし一方が他方の特性を持つている時でもいったん手紙を書く段になると女性ならば女っぽい書き方になってしまう。ということから文章というものには誤魔化しがきかない、とは言っても他人の文章の真似をして誤魔化すこともあるしあからさまになり切らないことも誤魔化しと言えるかもしれないが、特に後者の場合は後悔いやな想い出とならないための心づかいであり礼儀でもあることを強調している。

「リズム」（一九五五年十二月）は文字通り手紙の中に現われるリズムについて述べている。書かなければならないことがはっきりしているが無駄なことを言わずに率直に呼吸を乱さずに書けるそれをリズムと言っている。相手に憤慨したり抗議をしたり最愛の人にあてて書いたりという場合を言っている。自分の生命が無視されて誰かの言葉によって語られたり綴られたりするのは不満であるはずだという書き方がされていることから、このリズムは生命のリズムの意味でもあらう。さらに手紙を念入りにていねいに書くことはそれが自分を発見するいい機会とも言っている。

「アクセント」（一九五六年一月）では手紙の中のアクセントについて述べている。言葉のアクセントではなく「生活のアクセント」心気転換の意である。手紙の文章がだらけないために話しかけている心を失わない、相手の気持ちを尊重して退屈させない、一つのことをはっきり知らせるのにはそこから考えをそらさないようにと述

べている。さらに他人に鮮明な印象を与えるようにすることは自分にとっても印象を整頓することになるし平凡な一日の生活にアクセントをつけることにもなると言っている。

手紙について書かれているのはこの文章までである。手紙の相手に対して自分の気持をあからさまに書かないように相手を退屈させることのないようにと述べる一方で、そのことは自己の印象を整頓することにもなる自己の生活にアクセントをつけることにもなるなど自己の問題としても論じているところに特色がある。他を論じながらも常に自己を省察する視点を保持し続けるといふ姿勢が見られる。

五

「日記について」（一九五六年六月）は連載の最終回にあたる。日記を書くことの中に潜む目に見えない害について述べている。一般的には日記を書くことはいいことだとされているが自己弁護という弊害がないこともない、その逆に自分をひどく扱う場合は非常に悲惨な自分を創作してしまつて動きがとれなくなることもある。さらに自分を叱責するその自分が大きく立ちふさがつてきて叱責を受ける自分を隠し自分に対してそれだけ怒りを示し得るという自己へ重心が移つてしまふそれ以外のことに眼が向かないようになることを指摘している。嗜虐性を帯びやすいことを警告している。

「白い頁の魅力」（一九五六年二月）は日記の中の嘘偽りについて書かれている。日記に嘘は書かないというのは大体嘘で他人の眼をおそれるか自分の眼をこわがって偽りを書く。アミエルは日記に

生きるといふことは日日に快癒し新たなることであると書いたが快癒すなわち絶えず自分を見護り自分に気がつき明日のためによりよい状態に置こうとする精神状態を意味し、偽りのない真実の自己を回復することを意味している。そのためには白い眞は過ぎた一日のためにあるけれども明日のまたその先に続く白い眞を見つめながらそこに真実の自画像を書くべきだと書いている。

「深刻を悦ぶ心」(一九五六年三月)は日記を書く人が気をつけなければならぬ日記の恐ろしさについて述べている。日記の中で自分を責めそのことに酔ったり、懺悔したり誓いごとをししたりすることによって動揺した心がやすらぐということを指している。苦しむことや深刻になることがそのまま思索的であると思うのはまちがいである、しかし日記の中では私たちは自由であり解放されているのでまちがいを犯しやすいため日記は恐ろしい場所でもあるのだと言っている。さらには日記をうまく書くことはすすめない方がいい日記を書くことをすすめている。いい日記とは内外の生活の中の事実がより正確に書かれ毎日毎に新しい自分を発見しなおすきっかけともなりうるものを言っている。日記の盲点・陥穽をよく承知した上で木当の意味での思索を深めよということであろう。この思索は自己省察の意味合いが強いのももちろんである。

「幸福の影」(一九五六年四月)はユウジュニ・ドゥ・ゲランの日記の一節で始まる。彼女は亡くなった母に代って弟モオリス・ドゥ・ゲランの世話をしていた。二人は南フランスに住んでいたが弟はやがて故郷を離れトゥルーズ、パリ、ブルターニュと旅をする。姉は弟が信仰を失い人生に苦しむ姿を見て愛と祈りをこめて弟のた

めに日記を書く。弟が印度生まれの娘と結婚するという時に彼女は初めてパリに出かけるが弟は胸の病気が重くなりやがて帰らぬ人となる。ユウジュニはその後も弟のために日記を書き続けた。このユウジュニの日記のように誰かにあてて書くこともあってよいとしている。自分のことを自分との対話のつもりで書くときままにぞんざいになってよくない。真剣に正確に念入りに書くために時には誰かに話しかけるようなことがあってよいとしている。自己省察的姿勢を保ちながらそれをより客観的なものとするための一つの方策として述べられているのである。

「素顔」(一九五六年五月)は日記のなまなましさということについて述べている。京都大学学士山岳会の登山隊によって書かれた「アンナブル日記」や戦争中の永井荷風の日記を例にその日その日の感動や迷いのなまなましさは時がたつにつれてあるものは流れ去りあるものはとどまってもう一度そのまま呼び戻すことはできない。書かれてある内容に矛盾することがあってもその未完の姿の中に書いた人の人間をより知ることのできるものがある、そこに日記のなまなましさの値打ちがあると述べている。自分の日記は自分をつつす鏡でありそこに自分のほんとうの姿を見たいとしている。絶えず自己を観察し少しの変化も見逃すまいと心がけているのである。ここまでが「若い女性」に連載されたものである。

六

「思想の表現」(一九五三年十月)は文章になった思想の難解さを述べている。思想を表現する形式は論文、随筆、ドラマ、書簡な

ど種々あるが読者が論文を除いてこれらからじかに一つの体系を読み取ろうとすると読みづらくなる。いきなりその思想をとらえようとしなくてもまず書かれたものによって知るべきものはその人の呼吸であるとして、思想と表現形式との関連について大雑把にいわゆる体系家に属する人と体系を持たない人や体系を作ることに関心を持たない人がいると二つの分類を示している。どちらの分類に入るにしても無味乾燥で難解難読で時には有害無益な文章の原因となるのは日本でヨーロッパ風の思考方法を採用したことと翻訳調であることとしている。呼吸に関連して人間の呼吸の限界を越えた文章は超人的であるとするのも興味ある指摘である。論理的構成はしばしば人間の条件を越えやすいとも言うのであるがこの人間の条件というのも呼吸あるいは息づかいのことである。呼吸の限界を越えた文章は避けるべきだということである。

「あとがき」で氏は文章表現について考えをまとめてみたいと思うが幾つかの大切な項目をあげて説明することなどはとうてい出来ないと言っている。論文という形式は自分の考えを表現するのに適当でないと判断してのことであろうか。また体系ということについては氏は自身体系を作ることに関心を持たないと見なしているのだろうか。この文章表現に関する一連の文章がおおむね随想風であるのはそういっただけに由来するのかもしれないのである。

七

申田氏の文章をこれまでややくどいくらいに引用して十三篇の文章について氏の文章表現に関する主張を見てきた。簡条書きにま

めると次のようになる。

(一) 文章表現は、苦しみだけを伴うものではなく創り出す悦びをもたらしものである。

(二) 紋切型の表現は、文章の個性を損うのでできるだけ避けるべきである。

(三) 自分の書いた文章を朗読することは、自分の呼吸を大切にすることでもあり、不自然な技巧を避けるためにも是非すすめたことである。

(四) 文章を真剣に書きたいと思うならば、手紙や日記をていねいに力を入れて書くことを心がけるべきである。

ア 手紙にはあまりあからさまに自分の気持を書かない。

イ 手紙の文章がだらけなように心がける。

ウ 日記は自己弁護や自虐的傾向を持ちやすいので気をつける。

エ 日記には自己の真実の姿を書き、新しい自己を発見し自己を育てていく場所にする。

オ 日記はややもすると気ままでぞんざいなものになるので気をつける。

(五) 文章表現することで人は何らかの形で現実と直面する。他人の生をより深く理解し自己の真の姿を知ることが文章表現の前提ともなる。

八

文章の批評は色々な形で行われる。児童生徒と教師の間で、あるいは児童生徒相互の間で、あるいは一般の人の間といった具合で

ある。生徒の作文を相互批評させるといっても作文の内容や批評の方法等によって事情が異なり一概に論ずることはできない。ここでは、六百字程度の課題作文を主題・構成・表現・表記等の項目別に評価し短評を加えるという相互批評に付随して、生徒がそれをどう思っているかを調べてみた。結果は次の通りである。(昭和五十四年十二月実施。三年普通科三学級、理数科一学級を対象、回答一六七名)

作文の批評について

(1) 友人の作文を批評する(国語の時間に)ことは、自分の作文力にプラスになると思っていますか。

ア はい(61%) イ いいえ(15%) ウ わかりません(24%)

(2) 友人の作文を批評することは、作文を書いた本人にプラスになると思っていますか。

ア はい(75%) イ いいえ(6%) ウ わかりません(19%)

(3) 自分の作文を友人が批評することは、自分のプラスになると思っていますか。

ア はい(76%) イ いいえ(6%) ウ わかりません(18%)

(4) 自分の作文を友人が批評することについて、どう思っていますか。

ア よいことだと思う(35%)

イ よく書けた時はよいが、そうでない時は困る(26%)

ウ いやだと思う(18%)

エ わからない(21%)

(注) (一)の中の数字は回答者の比率。

生徒は相互批評に対してこの結果を見る限りでは好意的である。しかも批評するより批評されることの方がよりプラスになると思っているようである。批評されることについていやだと思うのが18%というのは、多数のものがプラスになると見なしているのであれば当然のことであろうか。しかし、二割近くの生徒はいやだと思っていること、三割近くの生徒は困る時もあると思っていることに留意して今後実施していきたい。

相互批評の場合と生徒が実際に批評を求めるときとはその批評の受け止め方に自ら違いが生じてくるのは致し方ない。けれどもいづれの場合にしろ、串田氏の言う「批評するものの親切さ」「批評の技巧」の問題に十分配慮しなければならないのは当然であろう。

九

串田氏の文章作法の特色の一つは、その根底に自己省察的視点を持つことである。紋切型の表現を嫌い呼吸を大切にすることは、自己の生を大切にすることであり自己省察を深めることにつながっていくのである。手紙や日記をていねいに力を入れて書くことをすすめるのも、それによって自己の姿を正しく理解し自己と現実に対し

てより深い省察を行っていくことを意図しているのである。この視点を基にして人生を展望するのであるが、それから得た諸々の印象やそれに対する認識で以ってさらに自己省察を深めていくという図式を見ることが出来る。氏には他に自然や芸術や人生について書かれた文章が多数ある。それらの中にもこのような視点を見出すことができるならば、氏の生き方の問題とも関ってくるのであるが、このことについてはまたの機会に譲りたいと思う。(1980・3)

(山口県立岩国高等学校教諭)